

# 1年 国語科学習指導案

授業者 青山 千秋

## 1. 単元名 「『すき』という言葉のその先に」

(光村図書 1年下 『ずっと、ずっと、大すきだよ』 ハンス・ウィルヘルム 作)

## 2. 単元の目標

○場面の様子に着目し、「ぼく」の行動を具体的に想像する活動を通して、語彙を豊かにする。

[知識及び技能 (1) オ]

○場面の様子に着目して「ぼく」の「エルフ」に対する行動を具体的に想像する。

[思考力、表現力、判断力等 C(1) エ]

○「ぼく」の「エルフ」に対する行動を具体的に想像することで、物語の解釈が深まり、そのよさを実感することで、これから読書生活に生かそうとする。

[学びに向かう力、人間性等]

## 3. 子どもと教材

「次の時間も国語の授業をやろうよ。だってみんなで話しあうのが楽しいんだもん」授業時間内で問い合わせの解決に至らず、続きを翌日にもちこむことが決まった際にある子が発した一言である。本学級の子どもはこのように解決に至ろうとすることに楽しさを覚えていることがうかがい知ることができる。子どもはそれぞれの気付きをもとに発言をし、対話を重ねていく。その過程で生まれた「ズレ」をもとに「みんなの？（はてな）＝問い合わせ」として取り組む学びを積み重ねてきている。

5月に実践した『はなのみち』では、【場面】ごとの様子を想像していく中で「4つの場面の季節はそれぞれ何なのかな？」という疑問が生じ、それを「みんなの？（はてな）」として追究していく学びが展開された。「種を見つけた場面はストーブみたいのが描いてあるから冬なんじゃないかな」「花が咲いている場面は、カエルが出てきているから夏だと思うよ」と挿絵に描かれているものから想像したり、「『あたたかいかぜがふきはじめました』って教科書に書いてあるから春だと思うよ。だって夏だったら『あたたかいかぜ』じゃなくて『あついかぜ』だと思うもん」と叙述を根拠にしたりして解釈を深めた。

また7月に実践した『おおきなかぶ』では、「何でかぶをひっぱるのがこのような順番なのかな？」という「みんなの？（はてな）」が問い合わせられて、「歳を取っている順じゃないのかな？」「大きい順だと思うよ」とそれぞれが解釈する過程で「ネコとネズミは仲が悪いのに何で呼びに行ったのかな」という物語の設定にはないが、経験や主観から新しい問い合わせが生じ、それを追究していった。そうする中で「もう少しで抜けそうだから小さなネズミでも力を貸してほしかったんだよ」「トムとジェリーみたいに仲が悪いかもしれないけど、かぶを抜くために協力したんじゃないかな」と叙述をもとにその【場面】をより豊かに想像することにつながっていった。このような「問い合わせ」は一見、叙述から解釈するという国語の学びの本質から離れているように思えるが、子どもの素直な読みや気付きを大切にすることで、【場面】の様子を豊かに想像することにつながったと言える。

本実践では『ずっと、ずっと、大すきだよ』(ハンス・ウィルヘルム作)を扱う。私は、この物語の根底を流れているのは「ぼく」の「エルフ」に対する変わらぬ愛だと考える。幼き頃から共に過ごしてきた2人ではあるが、エルフは先に歳をとっていき、いつしか階段も上れなくなり、死を迎える。その際、「かなしくてたまらなかつたけど、いくらか気もちがらくだった。だってまいばんエルフに『ずっと、だいすきだよ。』っていってやっていたからね」と自身の【気持ち】を伝え続けてきたことに対して、ある種の満足感を得ている。それが「ぼく」を支え、「なにをかっても、まいばん、まいばん、きっといってやるんだ。『ずっと、ずっと、大すきだよ』って。」と今後、生き物を飼ったとしても変わらぬ愛をもっていくことを誓う。「エルフ」の死は「ぼく」にとって大きな悲しみであるが、この経験を通して、「ぼく」は成長をしていることを読み取ることのできる物語である。

一方、子どもにとって「死」を初めて扱う物語であるため、大きな悲しみを受ける子もいるだろう。どのような解釈をするか、その子のものの見方が大きく反映される物語であると言える。

本学級の子どもは自身の感情を「いいと思う」「よかったです」「よくない」という漠然とした表現で終わらせてしまう【場面】が見受けられる。それは語彙が少なく自身の感情を適切に表現する言葉を獲得していないなかつたり、自身の感情を適切に表現する言葉を選択する経験が少なかつたりするからなのではないだろうか。だからこそ、様々な解釈が生まれるであろう本教材をこの時期に扱うことで自らの感情を適切に伝えようと叙述に立ち返ったり自身の経験と関連付けたりして言葉を吟味しながら、言語感覚が磨かれていくことを期待している。

#### 4. 本単元における『その子らしく学ぶ』～本単元で願う「心の動きを伴う経験によってその子に還るもの』～

子どもは『ずっと、ずっと、大きさだよ』という題名を知ったとき「家族」「友達」「ペット」「ゲーム」など自身における「すき」と結び付けて想起するだろう。言葉に対するイメージを膨らめた後、教師による範読で物語と出合う。これまで出合ってきた物語と比べ文量が多く時間の流れも早いため、物語の全体像をつかめず困惑する子がいるだろう。「どんな人が出てくるのかな?」「どんなふうに時間を過ぎていったかな」と問い合わせながら物語の大体をつかんだところで、ある子は「エルフ」の死に悲しみの感情をいただき「『エルフ』が死んじゃって可哀想だった」という感想を述べるだろう。また、ある子は「エルフとぼくの仲良しな感じがたくさん伝わってきたから『いいお話』だった」と、それぞれの「ものの見方」を發揮しながら感想を述べるだろう。第②時では、きっと一読しただけでは分からぬ「ぼく」の【行動】について「はてなマーク」を付けることを提案する。すると「何でエルフが死んだときにいくぶん気もちが楽だったんだろう」「どうして、新しい子犬をもらわなかつたんだろう?」「何で、バスケットをあげたのかな?」「何でいつか新しいきものを飼うんだろう」と、「ぼく」の【行動】に多くの疑問をもつだろう。それらを整理していく中で「ぼく」が「エルフ」のことを「すき」だという気もちの裏返しであり「何でエルフのことがそんなにすきなんだろう」という思いに焦点化されていくことに気付く。そのため、「『ぼく』になって『エルフ』のすきを見つけにいこう」と読み進めていく目的を共有する。

単元中盤では、子どもから生まれた問い合わせ順番に解決していく。第③時では「『ぼく』にとって『エルフ』はどんな犬なのか」を考える。「小さい頃から一緒に大きくなってきた犬だよ」とともに成長してきたことや夜、眠る時もずっと一緒にいたい存在であること等2人のつながりの強さを読み取った子どもは歳をとっても「エルフ」のことを大切に思う「ぼく」の思いがあふれていることに気付くはずだ。第④時では、「『エルフ』が死んだのに『ぼく』の気もちがいくらからくだったのはなぜか」という問い合わせを扱う。前時で2人のつながりの強さを読み取った子どもは、この問い合わせに対して「あんなにエルフのことを大きさだったのに何でだろう」と違和感をいだくだろう。しかし、叙述を根拠に「『エルフ、ずっと、大きさだよ』と伝えてたから『いくらか気もちがらくなかった』んだと思う」や「ちゃんと伝えていたから後悔の気もちは少ないんだと思う」と「ぼく」の【気持ち】を想像することができるだろう。第⑤時では、「何でとなりの子から子犬をもらわなかつたのだろう」について考える。「それだけエルフのことを大切に思っていたんだよ」「悲しい気持ちはあるんだけど、新しい犬をかうのはぼくらしくない」とぼくの【行動】に対して解釈をしていくのではないだろうか。そこで「なぜ、思い出のある『エルフ』のバスケットをあげてしまうのか」と問うことで、「今の『ぼく』よりも、その子の方が必要だと思ったんだよ」「バスケットが無くなつても、『エルフ』との思い出はなくならないし、胸の中に残っているんだと思うよ」と悲しみを乗り越えて新たな一步を踏み出す姿を想像しながら解釈するだろう。第⑥時で「何で毎晩『ずっと、ずっと、大きさだよ』をいうのかな」の問い合わせを考える。「これは相手に言っている言葉なんだけど、もしかしたら自分に言っているのかもしれない。後悔したくないんじゃないのか」と解釈したり、「死んでしまつた『エルフ』のことも忘れずに『すき』を伝えているんじゃないかな」と解釈したりするだろう。

そして、単元の最後には、「『ぼく』になって『エルフ』に手紙を書こう」という活動を設定する。子

どもは今まで読み取ってきたことを生かして『エルフ』がいたから、ぼくは自分の気持ちを伝えることが大切だってわかったよ。ありがとう」と思いを口にして伝えることの大切さにふれたり、「『エルフ』と一緒に成長できたから、ぼくはどんな生き物の命も大切に育てるよ」と「ぼく」の成長をとらえたりした内容の手紙を書くだろう。

物語を読み味わう楽しさを実感することでその子の言語感覚がより豊かになり、子どもたちのこれからの生活がより彩られることを願っている。

## 5. 単元構想（全⑦時間扱い／本時は第⑤時）

＜教師の投げかけ＞

子どもの表れ

最終時における子どもの表れ

○教師の働きかけ

①< どんなお話だったかな? >

- ・「ぼく」と「エルフ」が成長していくね。兄弟みたいだね
- ・話の途中から「エルフ」は、おじいちゃんになっていくね
- ・「ぼく」が「エルフ」のことを思い出しているみたいだね

< 『ずっと、ずっと、大好きだよ』の感想を書こう >

悲しいお話だった。  
「エルフがしんでいた」って書いてあって、「エルフ」が死んじやったのは悲しいもん

いいお話だったと思う。「ぼくたちはいっしょに大きくなつた」のところから、2人の仲の良さが伝わってきたよ

物語を読んで感動したよ。特に「ずっと、ずっと、大好きだよ」と、いう「ぼく」の言葉が、じーんときたよ

②< 分からないところに、はてなマークをつけよう >

- ・「エルフは、ぼくの犬だったんだ」ってどんな意味なの?
- ・「でも、エルフはぼくのへやでねなくちゃいけないんだ」って書いてあるけど、何で一緒に寝なくちゃいけないんだろう?
- ・「いくらか気もちがらくだった」のは悲しくなかったってこと?
- ・「ぼくは、いらないっていった」ってあるけど、何でいらないの?
- ・何で「ずっと、ずっと、大好きだよ」って言うのかな?

「ぼく」になって「エルフ」の「すき」を見つけにいこう

③< 「ぼく」にとって「エルフ」はどんな犬? >

- ・小さいころから一緒にいて、一緒に大きくなつた犬だよ
- ・「ぼく」が一番、仲良しだよって言いたいんじゃないかな
- ・家族で一番「エルフ」のことを好きだよってことじゃないかな  
< 何で「エルフはぼくのへやでねなくちゃいけない」の? >
- ・年をとっても「エルフ」のことを大切に思っていることを伝えたいんじゃないのかな
- ・寝ている間に「エルフ」が死んじやうかもしれないっていう不安な気持ちが「ぼく」の中にあるんじゃないのかな

○「ぼく」が「エルフ」に対して「すき」に自身と重ねてとらえられるよう、子どもに「好きなもの」を想起させる。

○物語の世界を豊かに想像できるように挿絵を使用したプレゼンテーションを用いて読み聞かせをする。

○子どもが初読の感想を大切にできるよう、ノート記述の時間を十分に設定する。

○子どもは単元の問い合わせを生み出していく経験がまだ少ないため、板書や切り返しで学級の問い合わせとなっていくようかかわっていく。

○子どもが物語のどの【場面】を指しているのかが分かるように時系列を意識した板書をしていく。

○長い時間、ぼくが好きという思いをいだいていたことが分かるよう「エルフとともに育ったところ」「エルフが年をとったところ」「エルフが死んでしまったところ」「となりの男の子にバケツをあげたところ」「いつかの話のところ」等5つの【場面】にラベリングする。

④< 「エルフ」が死んだとき、「ぼく」の気持ちがいくらからくだったのはなぜだろう? >

- ・「エルフ、ずうっと、大すきだよ」と伝えてたから「いくらか気持ちがくだった」んだと思う
- ・「エルフ」が生きているときから、毎晩ちゃんと伝えていたから後悔の気持ちはないんだと思う

⑤ (本時) < 「ぼく」は何でとなりの子から、子犬をもらわなかつたのかな? >

前向きな【気持ち】

- ・すっきりしている感じがするから今はいらないんじゃない
- ・「エルフ」と過ごす時間をして出したいんじゃない
- ・新しい犬は「エルフ」の代わりにならないよ

未練がある【気持ち】

- ・なんだかんだ言ってもやっぱり「エルフ」のことが気になってるんじゃないのかな
- ・新しい犬をもらうほど「ぼく」は元気になっていなかつたんじゃないのかな

< 「ぼく」は何で「エルフ」のバスケットをとなりの子にあげたのかな? >

- ・その子の方が今、必要だからじゃないかな?成長したね!
- ・バスケットが無くなつても「エルフ」との思い出はなくならないからじゃないのかな
- ・すっきりとした気持ちなんじゃないのかな

⑥< 「ぼく」は何で毎晩「ずうっと、ずっと、大すきだよ」って言うのかな? >

自分が後悔しないために言うんじゃないのかな?「エルフ」の時もそうやって伝えていたけど、家族はそうやって伝えていなかつたから後悔してるよ

新しく飼うかもしれない動物を安心させるために言うんじゃないかな。そう言ってもらつたら動物も嬉しいし心から安心すると思うよ

- ・「エルフ」に向けて言っているんじゃないかな?死んじゃつてすぐそばにはいないけれど、「ぼく」は「ずうっと、ずっと、大すきだよ」って伝えているんだと思うな
- ・「エルフ」のおかげで「ぼく」は成長できたから、ありがとうの気持ちを込めて言っているんじゃないのかな

⑦< 「ぼく」になりきつて「エルフ」にお手紙を書こう >

- ・「エルフ」がいたから、相手に自分の気持ちを伝えることが大切だつてわかつたよ。ありがとう
- ・「エルフ」と一緒に成長できてよかつたよ。どんな生き物の命も大切にして育てるよ
- ・これから、他の生き物を飼うかもしれないけれど、「エルフ」のことは絶対に忘れないから安心してね

○「ぼく」が「エルフ」に好きという思いを伝え続けてきたことがとらえられるよう、悲しみを和らげている要因に着目させる。

○「ぼく」の【行動】から具体的に【気持ち】を想像しやすくするために、「もし自分だったら、どうするか?」と問いかけたり、挿絵を根拠に解釈している子どもを取り上げて紹介したりする。

○となりの子から新しい子犬をもらわなかつた理由として「エルフ」への未練をあげていた子どもが、「ぼく」の成長を解釈できるよう、大切なバスケットをあげたという【行動】の矛盾に注目できるようにする。

○「ぼく」が言葉に対して込めた【気持ち】を理解するために、「ずうっと、大すきだよ。」と「ずうっと、ずっと、大すきだよ。」を音読して比べることでそれぞれの違いに気付けるようにする。

○成長した「ぼく」に寄り添った解釈を表出しやすくするために、「ぼく」になりきつて「エルフ」に手紙を書くという活動を設定する。

○友達の解釈にふれることができるよう、書き終えた「エルフ」への手紙を互いに読み合う時間を設定する。